慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評：阪本博志『大宅壮一の「戦後」』人文書院, 2019年
Sub Title	
Author	佐藤, 卓己(Satō, Takumi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2020
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.25 (2020. 11) ,p.115- 118
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20201120-0115

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：

阪本博志『大宅壮一の「戦後」』

人文書院, 2019 年

佐藤　卓己

人文社会系研究者の力量を示すものは、二冊目の単著である。一冊目は博士論文のリライトである場合が多く、執筆に専念する十分な時間をかけ、教員の指導を受けて仕上げられる。その意味で一定の質はあらかじめ保証されている。ただし、それゆえに一冊目で著者が意識する読者はどうしても指導教員、あるいは所属学会の研究者となりがちである。その枠を超えた広範な読者に届く著作を書けるかどうか、二冊目で問われている課題だろう。

本書は気鋭のメディア史研究者、阪本博志氏の二冊目の単著である。一冊目の『『平凡の時代』—1950 年代の大衆娯楽雑誌と若者たち』(昭和堂・二〇〇八年) は第 30 回日本出版学会奨励賞・第 18 回橋本峰雄賞のダブル受賞に輝いたように、関連学会で好評を以て迎えられた。その後、約一〇年間にわたり、雑誌や共著書に執筆した大宅壮一関連論文をまとめた待望の二冊目である。評者自身も、大宅壮一の発言を『『キング』の時代』(二〇〇二年、現・岩波現代文庫) の「岩波文化 VS. 講談社文化」論、あるいは『テレビ的教養』(二〇〇八年、現・岩波現代文庫) の「一億総博知化」論において利用してきたこともあり、「マスコミの王様」大宅壮一 (一九〇〇～七〇年) に関する阪本氏の論考に注目していた。それが集大成されたことをまずは喜びたい。

まず本書を読んで驚くのは、「大宅壮一の資料は整理されているはずだ」という先入観がくつがえることだろう。一九二〇年代から論壇で活躍した大宅については、大宅の遺産でもある「大宅壮一文庫」が著作目録をウェブ公開しており、詳細な年譜も「大宅壮一東京マスコミ塾」(略称・大宅マスコミ塾) の弟子筋が没後に編纂した『大宅壮一全集』全 30 巻 (蒼洋社、一九八〇～八二年) に掲載されている。大宅自身がほとんど語らなかった GHQ 占領期に、これほど著作データの「欠落」があったことには正直驚いた。丹念な誌面調査によりその欠落部分を埋めたことは、まず本書の大きな成果だろう。

本書は「評論家」大宅の全体像を示す第一章から第七章までの本編に加え、補章として少年期の新たな発掘資料をまとめた「旧制・茨木中学校時代の大宅壮一——時事新報社発行の雑誌『少年』への投稿活動と学業成績」、さらに資料編 (二四五～三二一頁) として大宅が編集兼発行者となった『社会問題講座』全 12 巻 (新潮社・一九二六～二七年) の構成リスト、全集未収録記事が多い『週刊朝日』『週刊文春』『サンデー毎日』『週刊娯楽よみうり』『週刊コウロン』の連載記事や対談の総目録などから構成されている。補章や資料編も大変な労作であり研究者にとっては貴重だが、以下では本編の論点を各章ごとに検討しておきたい。

佐藤卓己「阪本博志『大宅壮一の「戦後」』」『三田社会学』第 25 号 (2020 年 11 月) 115-118 頁

第一章「大宅壮一の「戦後」をどうとらえるか――大衆社会化／転向／戦争体験」では、昭和 30 年代に確立する「国民的評論家」という大宅評価を既存の大衆文化論を整理しつつ跡付けている。先行研究で大宅の活動期は以下の三つに区分され、その連続性と非連続性が論じられてきた。すなわち、雑誌投稿を重ねた中学生時代の第一期（～一九一七年まで）、左翼インテリとして編集・評論活動を展開した第二期（戦間期）、「マスコミの王様」に登りつめる第三期（一九五〇年代半ば～六〇年代半ば）である。先行研究では各時期の一部でのみ連続と断絶が問題にされたが、活動の全期間を射程に入れて「戦後」活動の意味を考察する点に本書の特徴がある。その上で、「一億総白痴化」や「駅弁大学」など流行語を生みだす評論家としての側面よりも、戦時中から始まる海外ルポルタージュの眼差しの連続性にスポットを当てると著者は宣言している。第二章「近現代日本における二度の大衆社会化」では、従来の非連続論が根拠とする一九二〇年代の左翼評論から一九五〇年代の無思想人宣言への「転向」を再考する前提として、戦前と戦後のマス・メディア状況を概観している。これを踏まえて、第三章「大宅壮一のライフヒストリー」ではその誕生から没後の大宅壮一文庫設立までの歩みが興味深いエピソードを交えて「連続的に」論じられている。

以上が先行研究の批判的検討だとすれば、著者の執念とも言うべき資料博捜が全面展開するのが第四章「戦中の大宅壮一――プロパガンダ映画」以下である。大宅が戦時下にジャワ派遣軍宣伝班員として活動したこと自体はよく知られていたが、ここでは写真と映画という視覚メディアへの没入という切り口から宣伝活動の実態が鮮やかに描き出されている。こうした戦時下の宣伝班体験がやがて「傍観者」的知識人、「テレビに出る知識人」としての戦後活動につながるとの論旨展開は見事である。だが、おそらく本書中、最も高く評価される研究成果は、「通説」を覆した第五章「占領期の大宅壮一――「大宅壮一」と「猿取哲」」だろう。この時期の大宅については、ほとんど先行研究が存在しなかった。大宅自身が「「無思想人」宣言」（一九五五年）で述べた「文筆的断食時代」の回想を誰もが信用したためである。敗戦後、大宅は農耕生活に引きこもったが、「サルトルの哲学」を意味する「猿取哲」の筆名で再出発し、その正体がばれた段階で「大宅壮一」として再登場した、という図式である。しかし、著者の調査によれば、占領初期から「大宅壮一」名義の記事は地方の新聞・雑誌に多く掲載されていた。つまり、一九四八年から約二年間「猿取哲」名義が利用されたことは事実だとしても、「大宅壮一」は戦後も一貫して使用されていたのである。さらに大宅はジャワ宣伝班の人脈から敗戦後に印刷会社トッパンの顧問に就任しており、完全に帰農したわけでもなかった。そうした活動の連続性を踏まえて、商業主義と社会主義とジャーナリズム（報道主義）の「ちゃんぽん」である大宅の発想に戦前と戦後の断絶など存在しないことが確認された。第六章「大宅壮一の「再登場」――大宅壮一の一九五〇年代へ」でも戦後初の単著『日本の遺書』（ジープ社・一九五〇年）などを雑誌の初出記事に立ち戻って実証的に連続性を裏付けている。

第七章「帝国主義／総力戦から東西冷戦へ――大宅壮一の海外ルポルタージュをめぐって」は、前半で一九五〇年代以降の世界旅行「裏街道」シリーズの系譜を日中戦争期のルポルター

ジュ『外地の魅惑』（萬里閣・一九四〇年）にまで遡った上で、最終節で本書の主張が次のようにまとめられている。

「大衆社会化が進む戦後日本において、戦時中のルポルタージュとプロパガンダの経験のうえに活動を展開しオピニオンリーダーとなった大宅壮一の「戦後」の姿と、その言説を受容した同時代の大衆読者の姿を見ることができる。」（一七五頁）

こうした戦時中と「戦後」との連続性の強調こそが、旧来の戦後民主主義観に立つジャーナリズム史やマス・コミュニケーション史と、冷戦崩壊後に登場したメディア史の歴史叙述を大きく分けるものである。私が本書の評者に選ばれた理由も、メディア史を総力戦体制論として論じてきた研究者だからだろう。実際、『現代メディア史』（一九九八年）から『ファシスト的公共性』（二〇一八年）まで私が繰り返してきた「マス・コミュニケーションはプロパガンダの代用語」という議論がこの最終節で詳しく紹介されている（一七五～一七七頁）。それに続けて、著者は「宣伝＝マス・コミュニケーション」が大宅においても正しいことを次のように論じる。

「大宅壮一が、戦時中プロパガンダ映画に従事し、戦後「マスコミ（＝マス・コミュニケーション）の王様」と呼ばれるオピニオンリーダーとして大衆をリードしたからである」（一七七頁）

まさに、我が意を得たりというべきなのだが、評者の務めとして敢えて言えば、最後まで本書における「戦後」の使い方に違和感が残った。それは「熱い戦争」の戦中と「冷たい戦争」の戦後という常識的な、あるいは通俗的な戦争観である。この第四節「大宅壮一の「熱い戦争」と「冷たい戦争」――大宅壮一の「戦後」」のタイトルを目次で見たとき、マーシャル・マクルーハンが『メディア論』で展開した「ホット／クール」の概念が使われているのだろうかと期待した。たとえば、典型的なホット・メディアである書物・映画と、クール・メディアの雑誌・テレビを対比することで、「メディア人間」大宅の影響力が大胆に分析されるのではないのか、と。

しかし、それは私の早とちりだったようだ。いわゆる十五年戦争を著者は「熱い戦争」と呼び、戦後の冷戦体制を「冷たい戦争」と常識的な見方をしている。その限りでは、メディア史的に大宅の活動の連続性をせっかく丹念に跡付けながら、凡庸なジャーナリズム史の枠組みに議論を回収しているように見える。

そもそも総力戦パラダイムにおける「戦後」とは、第一次世界大戦後のことである（拙著『ファシスト的公共性』、第四章「情報宣伝――「十五年戦争」を超える視点」を参照）。こうしたメディア史的「戦後」の視点でみれば、著者のいう「近現代日本における二度の大衆社会化」（第二章）、つまり一九二〇年代と一九五〇年代の大衆社会化も殊更に区別する必要などないのである。結局、第一次世界大戦後に編集・評論活動を始めた大宅壮一は最初から「戦後知識人」だったのではないのか。おそらく、著者がそれに気づいていなかったわけではないはずだ。むしろ著者が読者本位で選んだ良識的な記述なのであろう。というのも、本書の読者の圧倒的

多数はまだ新しいメディア史の視点ではなく、なお古いジャーナリズム史の視点に立つ読者だろうからである。それが現在のメディア史研究の限界なのかもしれない。しかし、阪本氏にはその現状を打破する力があるはずだ。だからこそ、大宅壮一の「戦後」も、やはり第一次世界大戦後なのだ、と私は主張しないわけにはいかないのである。

（さとう　たくみ　京都大学大学院教育学研究科）